

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

岷江入楚

藤裏葉
本末二

特別
~12
4604
32



43
112
4604
32



藤原葉

秋太上天皇尊号

ノ言宰相中乃應 雪葬院詮事

三月廿日大官亦忌日由大臣殿至極乐寺夕言同參

内大臣御内宰相才乃袖被川詮事

四月一日以在位感内大臣以中物為良招宰相

中乃詮事

安氏志下賜御直衣右宰相中乃詮事

宰相中乃向内大臣才子

内大臣也詮事 从中折友花加容人孟子

千ヶ乃秋茎植子 从中御導宰相中將令見

年正并乃詮事

宰相中乃忌日乃久お女下子

源氏又省利宰相中乃詮事

八日灌佛子

紫上詣贊義拂戒詮事

小汀文庫

内賀茂祭見物候す。酒者あ長所車幸奉
友典侍祭お立不ア。方寧相中見付候事。在要待、
惟光延
か余日明石姫君入内奉。其夜紫香君同車候す。

三日乙伎紫上退お明石上奉内り。
明年源氏君可有罕ト小室よす。

秋六条院准太上天皇事。

内大臣任左政大臣奉。ウキ方任中納言事。
タニ方才納言賜菊お大夫乳母西年厚、乳母三八位
ノ吉移佳二条をす。ハル太夫御不宿せとソレ
太政大臣廢二条をす。

十月廿日余六条院行幸事。

朱雀院御事。

ちう瑞翁有聲す。

奏他魚并船幸事。

小笠百官院は仰す。

藤表葉

花の御五卷若叶

15 調ふかくとくゆくとくなほとまめあらわし

花深代成九歲の二月より十月までの半月、あ柄表の

月年のす。

松原の春しをゆひもんを矣

御つておひとす年ねすの下すりしりと
かほしたの経と明石姫君の春まつ年候す。章相中
ねからうからわむとお年のはずよこととくとひ
おさきのひとおまうねすへ明石中あり。章相
中ねからうからまくとお年のはず。

か川へあや

タニ方才ノ年一か年もすすすく、内大臣の
退居わたりてあらじよドヘゆ。一佐、
後、波折

くハ内おきてすよしれぬよあゆむと

せうよりのいはれども

人うねりかふれ國ち

夜は先に内おきてすよしれぬ

いぢとよむ

あこ一云いはゆるてこれも内おき

けゆんとぞひて一言といひわ

あくの事はれ我まよを寄れ

女あくわがとぞ

じ燒き中身みちとおさりにありぬとま

せんとのうみゆ

物とんかと内おきてすよしれぬ

行かたまのうしと

タモのけはくとある時やすにすく

そよごのねはくとすく

かのま

す書本事のうきの本いとけじはなと

タモの居内

内おきてすよしれぬ

内おきてすよしれぬ

タモの居内おきてすよしれぬ

内おきてすよしれぬ

とてひよじて れはせす

十勢タキ方より まちむかへ

右方に十勢えタキ方より まちむかへ
私をもとめ不富先に十勢えタキ方より

定りたゞよひてまくはる御とひいわ

又こくあ

玄井らふふんとむしにんすとよ

人のぬめもく

又くらめてまかく下 まうる今事を

舟

山岳に山もくとれよ 秘事引立せきの
又内大臣とほり全方かと 附りてわざまく
とゆととれどもくのまやま
うちくのすのあやうわらとまく ねふともす
こでけてしじつと

まへよう芳寒通のよへ

おけぬまわすとおり けり

肉食のふ

私をもとめ葉一叶にめらかに盛と ま二葉
とて味肉大臣前面にて玉くみの。そびく時年れ
るのよとやのひととおこる所の年と内大臣
の年と事ぬを小かひり肉をれ性とぞう
うへ片れゆくとくみうけぬ事

内大臣とり君と親昵なまはうとある

私をもとめ何としなくとよはうとくじく

ゆくまな

おとくくりてたましんも

まとまくはくりてくはよととむくわくわくとく
やくわくとくわくわくわくわくわくわくわく

極も立満事 暫宣云建立

深草天皇行幸前日時昭宣五殿上臺供奉宣命

之書之書、當給有一筆彈之人。其指入作此件、非巧匠之所及。有
事の當事者、於之寶物也。天皇常令隨身給自芥何還佈。一回忽
失、以笏失大聲。給呂照宣公被行下可未進。由照宣不奉勅
令起。本立心中被願念。在此凡不未獻者、今生之遺恨。
也三宝可加謹念。念來得之處必可建立一伽藍也。願力不空。
未獻之天皇殊以感歎群臣之中。抽被御被印童之
條定有被恩食趣。厥其後照宣太極軍。進為異化。願
念立極樂寺給奉。

九條右丞相記云此

唐院極樂寺法性寺興福寺

李平王記
宋宣公
太史公
及先王
人康親王
追為祭文

公遠立一在深草

前
茶菴は三茶大文丸清月四月とあり送りて代うち
大文の小玉月菊菴は四月と見え、かうじよ清月とす
ちく八月九除服の日をうてあさきよじてのいふこむ

月此服之七月までよあつるれ近頃お云お文也是日二月
前卷より月と勘へて送除服近頃是今累懶
併く月とよも、其日教うる事は全二月方より百日か
ら五个月とあ、服百七十日とより八月九日比百四十
日とあるまへ——當時と不用りけり、小ちれり教習
近頃服わく、至服その五月より、三月とゆくとて服
中用ふ。舍^レ交入を以て今十^ノ三日より除服首半日丸
らとまとめて、うちけて除服をひらす。先是又日次を
よつテうけ兵の里も、ころするあり除服近頃の事もあれば
もれ遠くゆほえ。但^レ寧令服假年と服年謂は
二月冬服^ト不計^ト因^ム月其上月以下並^シ考計^シ
うあよんぐるや、傍處の墓廟にてとみよめしとよ
ういは所^レ也、内食^ト以ふへりて^レ此
者、もじるるみづれ、これつゝういわ^リまづ引く
四角の類いもつれ^トうろてい

あれかと云はへ
筆算の筋あるゆるよ筆算の心をも
ひづめせられ
筆算の筆は
まこと上手い
まほゆりとへむあく
先じやかとちゑは
ほしの通路たゞ
筆相素室にて立ちと立ちて
タモが松田のゆすたねた
タモアキシムクル松
時ものせばれさぬてや
おとせ
せんのよトシテ
わらわ

アキのは事にすゆてひきくらべ
かどりうきよじゆくわき
タキのとやかくれをも
内府のりうわへすくめ入る新と
わと身アリテシテうちたまふ
袖波いさじせく
アキれゆと内府のり
アキ事或勘定又考辨
アキのりひんと
アキのゆりよ入候
アキ海の中入りとされ候とも我といふて
アキのゆりよ入候
松本はのゆれ

物もたぐり素の世

ゆうべのよみがえり
おとこと女と

大義の如き行ふに内なる心と氣の如き

の如いと紀
もえ葉てたまの

中
大
小
也

はまくらのうへりは
かわくらのうへりは

井に水もさへ葉に

卷之三

伊太にはかくの如きの事は、
アリカニシテ、

卷之三

少子と之の間

わよこじはゆく

却つひめひゆわ
日ひかくひく

上旬十日の用事より私までりよりおちて

内方元音

相本使山内方舟より是書へ消息あり

一日の手

弟
你
事
在
多
忙
不
要
急
又

或いは
その先
は止
まらぬの
如

わりとおのたの子をれようねアシタモアケモ

夫私生見事耳。名はすとやのめす也。也。おとじ其心

江東の事は、たまに
うつとゆく
の叢書

奇しきわざなむらのうれしきあくび

の事は、
はるかに
の事は、
はるかに

伊勢
うは舞がやまとウカの花もれ咲のむく

老小のれんをもつて
元氣のあらわし

萬葉集
卷之三
深秋

卷之三

東陽才子也少有才氣
勤矣所造尤奇

或
れ
は
さ
う
だ
ま
で
か
く
あ
る
と
い
ふ

此其一也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

ゆく
往々御もとまといぬふと

松云年未の事
ノリカケテ
城主がちとす
り

とおり又は不^可能^な詞^じをもつて、前^{まへ}の事^{こと}に對^{むか}ひ、後^あの事^{こと}に對^{むか}ひ、

手取川
なる川の流れ

アリスの腰ウエストでねじりとこしきりを

門
戶
一
中
國
人
民
共
和
國

かのじよと

留得一枝春
在供門前

よしのりふをいぢひにゆきて

タ音の詞

サヌニテシヨリモトマツトアリ

柏木のわはもとのつみセリ音ねだすなやれど
レモヒシタ音とのよとおはとつてきく

おとおおすよ

季風序のよまぐる

けを仕事申へ先せりよりよと

おとやわりてゆね

五音同言昇のるアリトモ

さしもみや一音ハトキナウトシモ

音者うらり

アミの假利ありトシムカリ不若モテシモ

ロリモナリ

ミハシ能解義不當モトシムカリ音者

トシムカリ

わふわざりこかくヰケケケケ
タ音の内也とせねと
ほのくつたわやくもまくはるはると
とふわざりとうり

ウモウモ

タ音の内也とせねと

此處對他說道、

卷之二

を主兵のよみゆきとは二苗山は記を曰ふるわざ
巴非參議の二位乞位の中をとどけり者、時寧
わすれ非あ無くもかういわまわせられ
ひこす、君の曰くもくへとゆきと
之位中歎たとて御もんわれど、かみぬる事似
合ひりと
奇

或
そとは観様の
お詫び申す

いはれま二位に位すより十ねり其事は二十九
年も私云非奉儀の都二位に位すより三十
年をとては親接す

アリも曰へりくじと
あくびのよそよ
あくびのよそよ
むとひようと
サハの
むのよそよ
サハの
むのよそよ
年を
年を
年を
年を

の今
やうかう
トモ
のゆね

あ
の
ま
す
か
ね
く
り
せ
ん

たまごくよそくいふくわくす

おとおをひいまほくわく

ゆゑに高座たむかはくういり

おつううりひとおま

ゆゑに居の聲來一ておちる

小言やきぬ音をよのそきて

ゆゑに居の少言や音をより音をよそく

いとくじざく、寺をうるお

あさふれをうりて

おとおをうる音を原もあれども

われて

風けく風けく風よ終よくうきよく

たまゆるまでおけくぬづく

こまくらうしにれてとみやうだり

是い風やかうきに清ほえ年うてたらば

今おとせそそがん人音風うひうそとぞうとぞう

あはれられましまま

ク音ハ傳日うち立方せんたれを

ひもひぬれ

河旗と

ちこちこゆく

いふはまく

むまくわいひ

がくク音をやひ筋のつゆちにりてくふな

ぬまやふしつ

たすれ時経

春の花の流れ

おとせそ

せうくくしとてうりり

桜のうるはすすいのねじまくひひ

おとせそりうきわせてとソア

このおじう

歌なり洋

うよおじう

のう

うすかのをねとのとくうじう

あや／＼んとく

あや／＼んとくの春ふなとづるをがうてはるの興うつる

そしよあつ／＼とゆり小

（向）案のゆれをよみす案と女またとく（向）案

らりぬきとく、是もとて内おにのとく

月／＼いてゆと

（向）冒一日こりととて月／＼いてゆとがうと

但下れ月七日のり月水とわづれよとくとく

（向）うや引あれとてまつ

（向）あるは月一日とありとて内万種とゆ寄り見景

せきあみみえと一月うろとつる面白也

（向）うとれくとくをいと一ねてみもアリとる

（向）内左後とく碎年とてツ考とてお碎りとくと

（向）考とてお碎りとくと

（向）うか／＼て

（向）うか／＼て脚附ありと

未まの世よあまももむれたのゆり／＼くよ地／＼地
（向）うか／＼いづりとく人びれとて活かんつ／＼あとと

（向）うか／＼てよて天下有識者とて内在て歎却

（向）うか／＼トとくみく／＼儒たとひ主事の／＼人

文考の／＼とひ風／＼か／＼つひとて書考

（向）不あつとれんえ／＼うね／＼く／＼

（向）内ちのの詞（向）天下有識

（向）いふり／＼くとく人

（向）我りとてんとてりよとく

文籍もあれとよとあもくとく

（向）九辞極文籍（向）んとくとじ籍遍と

（向）向うんせよとじんれいとじよとじよとじよと

（向）そり／＼一勤考りんとけらどもじよと

何
史記曰高祖幸丈太公以家禮致之高祖雖子君也太公難答
又云後高帝記高祖五日一朝太公之家令說太公曰天子二日土
七二王皇帝雖子人主也太公雖父人臣也祭何令人主拜人臣
如此則庶重不行後上朝太公難擁彗迎門却行上大轂下
扶太公上坐曰帝人主也祭何以我亂天下法於是上心善家令
言賜黃金五百斤夏五月丙午上尊太公曰太上皇私子
也

内閣をやまへてゐるに在りよりノヨリシテと
左多モアシテアリ不捨、父の礼セサシモ用ひあり

劉玄云史記高祖紀單父人呂后善師令避仇從之客
因家沛。至沛中豪傑集。吏聞令有重客。皆往賀。蕭何為主
史主進令諸大史曰進不滿鉞坐之堂下。高祖為亭長素易
諸吏。乃給為謁。賀鉞方實不持一錢。謁入。呂后大怒。起迎之。問者
好相人見高祖狀良因重矯之引入坐酒間。呂后因目而留高祖。
竟酒後。呂后曰臣妾人多矣。無如季相。願季自愛。臣
有良女。願為季箕帚妾。沛羅罋。呂后怒。曰公常欲奇此女
與貴人。沛公善以求之。不与。自妾許。與劉季。呂后曰此非兒女子所知
也。卒與劉季。呂后乃呂后也。生孝惠。魯元公主。

を我力と諱退ヲリ無事とモ重んじられノ義ハナキシリ
れもけきり歎却とて而モ之述懐の詞書衣ハ雲々在乃ソ
内大臣の許宿と有ト、非ト寢初は矣リ陳し召詞
其私ハ呂太后シ其父呂スフ高祖シテ其母の呂媪フ懦
情セリと其怒う兒女子知れ非トテ行ゆ高祖ア
あアハセラル此故事云キスルノ由ニ云わの處アリと内大臣
許宿アリトドクナリト云ムル不承乞御け厚
わ敷サヌ又は卷ノ奥ニその秋を上天皇モモアリと
人臣モ考高祖監觴、叶首尾と以テ今ハ御アリ
已上秘抄ノ内ヘミ丸院自筆トニ祐書入シ

ナホノのどくもくお引ニテアシルヒ
夫妻儒の子アヘト云花肉ナリトナリト
す儒のタガハ師道のすニヤレト、官位トソシ叔父
ナレモ、ソクニムナシとの語

内 美先高祖紀赤子別 高祖廿日一朝太公如家人父モ礼太公

家令況本ス曰天無三百土無二王今高祖雖子人主也太公雖父
人臣奈何令人主孫人臣始此則威重不行後高祖朝太公擁
篲迎門却行高祖大驚下扶太公と曰帝人主也奈何以我乱
天下汝放是高祖乃尊太公爲太上皇心善家令言賜金五百
百斤往葵邑曰不言帝非天子也。宋急曰桺木紀秦始皇追尊
莊襄王爲太上皇已有故事矣蓋太上者血上也皇者德太
於帝故尊其父号太上皇也

已上祕抄ノ内ニ先自筆トニ云如其諸河海ミ我く而ニ先
被注加げルニ間重載

いはくいぢやま
肉太臣のまんをなまづりふれきりてお

あらうじや

肉大臣の瀧也

りでにかずかづけりすひ酒の三て御事もむかへす

私落抄上皮川方

いてり秘リ音て詞

首とさりへいとせりうそとは

か致仕大臣大臣參上術とのおひわとおまゆ

つよへと

夕言詞方としてせは仕大臣つよへとおどら

うちもおはねは極致おこす

いふからん一あそ

道も殊めとおよきよおじりとしと善

のとろつたりとこわがりと謝うる間

かとよくもとよくもとよくも

か時々や相面奉、助一

かのうとひりてすくなく全すとすとあらゆ
かのうのせをとめや弄アリとくに苦と養育りま
あのうえ系のと

春日さすみのうえ系のうけい考前記をめん
内を食詞、美被上ナリ多用しナ月
私モトは娘モトハ心のへとすりし中おもてアモシ
うは我とこのまんとよる因毛の浦、
卷の右

みきよとひりてねすね

内を食のぬとけて相あのおもとてテラ書れ
五よくらすと書かれ居とゆとくいせう

りうやむり

タ音でいふと書くまで五よしてタヤじたる

内

しよよよと書くといせんなのをうりりとれ、とれ

夫
ねりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
とハ姫君の教たるゆゆかうりへーと
云升るるすとひのりすく女と紫またと松
こととねりとてとてとてとてとてとてとてとてと
松ゆく下りてありゆる宿うると
かとひきんといせんのゆゆてし
私ト向ひとすとひすとひすとひすとひすと
の然んゆよゑちと云升るるすとけいもん
ひすとゆりて恨とあきとあきとあきとあきと
君一とて和とれさんとよるよるよるよるよ
より又紫ゆりのとてとてとてとてとてとてと
もとととととととととととととととととととととと

よんを一更

寧れさうてとひしかりまくに、さわもり
に御あ勧め盡よたて、至と納言下賜り不差ゆ
天蓋をわたりて、いをよくすりて有難す。是の事
わづぬる外嘗のあれとあると

卷之三

私内府おうちに小第こだいと又早はやくもとしげて令おち下おろす
つるまがりとへ
著よ
いくうちありけり春はるときもイ先さきのいとくりあさん
向むか徳宣集とくせんしゆとくせりそこはうすのじやうじゆを
春はるれ來くわつゝよつゝと
いくうちまり花はなとくらつめうるすめあさん
あまもくたまとももふつとも花はなのいとうとくらす徳宣集とくせんしゆ
す
いくうちありまんじうアリけりはまひこ
ひまわりの花はなとゆうへねつてとくらす徳宣集とくせんしゆ
草くさねりはまひこ

たとやめの袖よもぎりうてれみくノ
はたとやう 婦人日下元又キアリ又キアリ又キアリ
是ととも升へるよろこびへり そり 異内
タヌカ下雲舟のちの成えとまくらとまの愛接せ
つとくがんたゞ

四月七日の事。朝早く見つづレホトヨは
トウヒトリツヘ

けまくらの御指

アラタニイハシナリ

私をあの街よ月夜のまゝと
ゆめゆめのまゝとおもひて

五
九
九
九
九

のうね 柏木のうへ みかの

向
草
垣
僕
馬
永
昌

行
ゆかれてよととおひすくしれす
ときよしれたれとてんやよもじうら
ちりけ家のけよのわくにまくはけくし三
あつての水牛もとくにあくまくもとく
のなのもうかすみとくにれいとくに
にゆううきり今うゑのうり方へ方へ
申うやうりがうてえまくせす
肉

けやけりのれ

いのうとその女の歌よ若り人のままでしもんてて
はしもんとうとううるるにキヤねしまへすとおこる
とおこるすとおこるけやけもつまんちゆすとの是
けやけいものまくおしげ詞はうあははう
不不たくまくまくとよりをやけよとひソリれふ年
下下ちりはあへとゆくへゆるへゆるへゆる
ああへゆるへゆるへゆるへゆるへゆるへゆる
ああへゆるへゆるへゆるへゆるへゆるへゆる
と例の庚物と例の庚物と例の庚物と年(よけ)と年
をもとからすとおもとおもとおもとおもとおもと
としとしとしとしとしとしとしとしとしとしと

トケヤケトと さて、内閣内閣
ナリト 内閣の内閣
ナリト お内閣
ナリト いわゆる内閣を
ナリト お内閣

このまゝは

のうじよのうよ年へよもとち内だよれ仕官年行
詠曲とすよ咸よみ（もとよみ）
夷とぞうげくとぞうりゆやまわらわるよばぬ者

句詩、歌詞隨て、其のうつり、

ねりいのこす

日暮の懐かしい物語
もしたやうに

ئى

九章

わきんしや

14 現に

おもひ草むとてのむすり

やうふね

ア音の休息と用意とす

れまなは

たほのうくせとてのね詞

じくわちし、それと

おのものけのくわと、平ねのア音より口

あくまよを内唇のゆへひつとそり

おもてゆくと、そのものけの筋をとらうる

かのわらわとよばねのくわくわくと音す

ねよらまわらわとよばねのくわくわくと音す

入らぬつゝ又國名云内大臣の方よりまくすゆし
のるシタ事と嘗て曰ふくにいふ事うそすまんと
トナリは良じ一頃に 又は河童名を推定してしけ
としゆ

めごととくーと 喜井島の心

うゑ不ぞくとやし

喜井島の心とタ事の事とこねにせりと
くわしもづくとゆふとのやりて室名を喜と
世のたゞいとも 故ク音ノ句

魚もよらぬ地といふるもせのたゞいもせりと
私云聞き右の事と川神のことをばけ川神有れを
うよしゆたゞいと字あがれあらむとすと
やまと里葉喜井喜とつとすとすとすとすとす
今すとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす
先づり書てゐく喜井島よりまくすゆ食事

くわしゆうりてゆくにゆくと書くのゆく

あふととくね

喜井島とくに書く

かのものとくにりつづわ

サカねのあ

これとくまわの喜井島よりつづくよ

つとくりづ

すしりづとくに

つとくりづ

すしりづとくに

のくらのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

のくらのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

はる呂羅馬示はれと見のあくとや國のあくとやま
きとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

私
誓
神
もよほ花の況と不用書又叶
かほがみ
來
い
れ
れ
ぬ
や
く
ら
ま
た
し
づ
る
の
ト
ち
り
く
一
す
算
る
の
あ
と
き
く
と
そ
し
な
り
け
り
か
わ
さ
ま
と
の
ひ
た
つ
る
洞
く
ぬ
と
あ
意
く
酒
む
の
記
す
て
ん
ト
を
促
秋
か
し
の
用
し
促
る

女とてうつむけと
そを昇るのふ
あひてはるをそむけ川にゆくとみゆき
も女のすこ城わきに左をへうじ川口の深ゆき
ちゆくとくわゆるうとおゆく
西年局のあわきに左といえかねのあらと暮
あいにくいひくいはくいはくいはくいはく
ゆくはくくはくくはくくはくくはくくはく
はくくはくくはくくはくくはくくはくくはく
はくくはくくはくくはくくはくくはくくはく
セイカテモラシケントメホカリ也

チ雲昇乃のあいと今清キトの席へ、ソニ
ねこト也。ナウ内
或抄宗と説トテ或人、云筆迹のよきやうよ
リてもよきいとキ。クルムシレタ書、我ら
やふふれぬとまづケおつれ、とるんれどや
のわく、と名をいひたうけりつゝやまゆ
けり、と女ておもむテ

あさゆ
のね
き算る詞つらひ
しきり
たやうたよ
とう
アホのゆく
西風
うきよへとまく
あはれにほのかをうかん

向
菊多刺用
生産奥圓
松固室松八雲
斯内^ミ、佐々
木^ミ、
大^ミ、
云^ミ

太政官府

應答芳。汝興回北散位三十六事
擬郡司冗八人。白河菊多刺守。守十人。自余
右直廁府。外散位亦如件。菊多直。義知依件。給芳

延暦十八年十二月十日
記

かのアノトノまわらはれも川見てたるよの、わすかなよ
岩と、おきでさくまつまことくらむ
くまのアヌヌ直引（アヌヌ刺）たゞ傍ニリキナチアト云

まくはりていたまき
くまのまことに用ひてはれまへ國府と云ひ
まへてちよどこのまゆりむすびたり。かど
とわかれをとほりしゆうおととおととおと

又もよみがへりうるのあれと申す。下は
アモトテ雪の事。詠るニケル方りん等
の女たるや。とさわい。とさわいとて、
ハシのわく。との事。ヒサホのわさき。おとし
け。とくして、アモトテタ。音又く。おお
にわらひ。わらひ。おとし。

あいよ、しく
たあ沈碑の金丸よむ、アケテ夕方のわ
あらじてそ、やがて
れとあれ、わらひよともゆき
祕美沙子トドリ

多ひりひいはすうすくよしゆるむ
つせしらばもか
もうすてすすめれ河つとやまわつとひ女のんとす
だもとよつてつれんじとくにするまゆ(ほんと)
メ
つせしらつ、女の心のとけり
タ方のみ通れ
くまへねへと
まのひつくよ(る)す
着ふじかくすくよるりも、ひこきよあううしゆのつと
おの年月のよしよ神をとくわ
ゆべしらとけいはくととのゑわくとくなみと
とくとくはくとくわく(目とくはく)まくとく
くまへねへと
まのひつくよ(る)す

内大臣の御子と鹿森一郎
先へおもての御ごよの事は同様に手本を出
わざわざおもての事
しりて名めう
しもはあれ日あひのうへあしのうと
ねけ御あるのれ
せりとまへをすれしゆるやとておき
ゆすれられはよけり
おみだるのれとおもへたてにくわがまとく
へれとへねまひいそくしてこれにゆめくおれり
とまわるのんやとあすけり方つりを
おほひのわく
はねのよみせは延と
おねよ
相本のはとあい
ほもいとく
年月日でくよのいとす

右とてよりかう人の

右近將監にまく叙辭せありとへせりとよ
タ音たすれにとね監うちまんたすれも恩今景

右とてうをも

六歳のとき **黒氏**を養ふを

年相はねしりとも **クニナリ**

けそいよみたと **ヨシノ**

さくらさくらせめども、みたとめやあると
寛平遺談た太將藤原朝雲に者功臣之後其の年雄

行正執政行先年於め事、有前失先節

人まわくまわるにまわるまでまわるをうるをう

よりうけよまげうかんとおひえいぢ

クア音のんをほのほの肉をのとせよとせよ

あすこまゆるぬりみとすこまゆる心をとせ

おもむかとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とせのんとせのんとせのんとせのんとせのん

内たとてえぬよあわらとくとく歎却のぬ所は

厚と脇立のとありて、とまよまざなひとえをはなゆ

まよまよとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ゆつ落向内たとておもむきまけゆくゆくゆくゆく

あとととよつ方へみくびいだにむちうりとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

見くらうすまよまよまよまよまよまよまよまよま

はまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよま

あまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよま

内たとのすと厚底のぬよおとくとくとくとくとくとく

私肉のぬをほのうれとくとくとくとくとくとくとくとく

مَنْ يَرِدُ فَلْيَأْتِ
وَمَنْ يَرِدُ فَلْيَأْتِ
وَمَنْ يَرِدُ فَلْيَأْتِ

事の如きは
内なると外なるの事と
必ず二事なり

アキラかのよしと
アキラかのよしと

或ね由流アラシのいとち地アマニチのあめれに
まよひのうへとれども人ヒトおこすやう
おとひえすよしゆきと
おわせん

をうもとをよしにすらはせぬかの處
矣 | 原氏亦多くとも四社
外の名をこ白いゆゑも生れ
むと申するを

寧れぬとうりをかきすりまわる
河西あたかの六月にひびすみの候とおもひて
ゆくと、さやかにあつたむせうわく

تَسْمِيَةُ الْمُكَفَّرِ
بِالْمُكَفَّرِ

タ音十九才より、今、名を、トモリアモロニアトリ
新家は諸拠ニ丁子深ノは、ウルハシラムシテアリ
ミナヒツムシレバ、アリキタマニキ深雪
たたこま明月姫も深おとこ、カク木林ナリシム
もしと秋云をもむかわや、アリ師匠ナリ、シカアリ
ゆづて、カマヤイナトアリ、キヌモ深ヒテ、ス白ニアメヒ
タラヒアヤ、毛アヒアヤ

御内院
仙妙見り
國史云仁明天和七年八月請律傳灯大法師玄
惠

まくらぢくらあくへ作りやれりおまえぞだい鉢者
カタツの水をアハムアマリあアリテ巻上さよる金箔
乃布故とももよしもともよしもともよけて風流打とわ
と天井丸のアハメ入一基蓋不すりおまえはあ今アヤ
辰上の墨盤のうすよとくとまやうかねのふをで
とびりて山房のアハメトメトメトメトメトメト
ほく出断の布故ハ紙をすりる本末の布故モシモシ
余師の傍よりのやりて仏事の作法とありても此等
くを全て先古寺師くりん仕じる事考すとくに筋道
勝引アヒキニこれて水とぬて灌仰ては礼仕も序作
布故皆アヒキニは仕事ハ推た天皇アヒキニ
毘藍城アヒキニも仕事にさる时天が下て水とぬてアヒキニ
あヒキニアヒキニアヒキニアヒキニアヒキニ
私~~私~~先~~私~~内裏~~私~~の灌仰~~私~~後~~私~~紙~~私~~と~~私~~家~~私~~と~~私~~作~~私~~
かかく、ウチアヒキニ~~私~~但大瓶と見~~私~~アヒキニ~~私~~か

おまくらのまへり
新親と大にト布施と用暮る
布施たととあもこられ女房の布施ともす
山せすとおやがすしゆ、うす
うづみ
定住文

新正大内下布施と内奉
布施たととあもこられぬ女房の布施ともなり
可かとおやでけしゆるをす
~~う~~灌仏^宵布施集^ね寛平八年 ^前
親王錢^也百文 大納言四百文 中納言二百文
四位百五十文 五位百文 六位并重^也十文
親王大臣^也五枚 大中納言^也四枚 五位二枚 六位并重一枚
推古天皇十三年是年新寺^月八日設齋會 日本紀
私^也首ヨリ 諸寺^也行^フ仏生令^ハ推古天皇ヨリ^はされら
灌佛^ト内裏^并親王大臣家^モイ^カく^シからく^シハ承和元
^公灌仏のとよ^ハ首^ハ後^ト用^フ中此^トり^ハ能^ハかれり
かまつこと若^ハ也
内裏^トイ^ハちこたな^シかまつ作^ハニ
うつふもあ^セし甲^ハ内裏^アすと

あかへたお
内官のみの才と實ひをもんが
うてうて
つまゆま
けりくわらひ
れおもせとつこのふ
れ又内官の才とうす

何のうきよをひかへ
うきよためゆい

わざわざお詫び

世說新語

書の事
本年と、梅案の仕事
が終り、と云ひ

か
ひ
明石の外志の者も(あらゆる)
た、のうえわれよまくてねと
秋日

賀茂ノ原前日於宝跡石生有神事号御歎御のし御
生せ見古之檢述日本紀云神聖生其中者或御禪ニテ
祭の前一日と云禪ヒテ生不外鼓アリトモ祭時
乃ム能不也

わざわざお詫びの言葉を口にせし
事は、さういふ事は、さういふ事は、
さういふ事は、さういふ事は、

神鈎へとすみねやくのありいとおえこむとよあれり
とあり

は第とこは以て紫上の宋花のより。看葉より。お
のわるこみ。世俗仰御。とももひみわれ。こよま
寄。御生御秋。ひるニアリ。別雪社。生御。わすれ。計鉢。紫上
まちりと。以の門よんえ。つづり

まことに、おのづかの事

まことにあくまで、おもてなしの心

御内使
御檢討
地足之主

の文庫

ちの仰ういゆくと打ひひぬとあくはま
あく葉よと空の娘あくはま

おまえの不^トいきよか
おもてのあゝ車

は山桜のまゝ車で、下りて水

金舞
金舞
金舞
金舞
金舞

おまの宵はすこうての夜

避れ車わ

5
おこり
原年のたとへはあらまことおほくす
うらのとよのたとへはあらまことおほくす

卷之三

萬葉の歌
レターパル

地の十九日とわ
祕、春日一月九日

或粉云等二種也

卷之三

おれは
タマリタマリ

うそくは、おまかせをうながす。おまかせのうそくは、おまかせをうながす。

其の事は、おまかせいたしません。
おまかせいたしません。

のせもとよりきれどのうちゆりまのせれたと
内

けりの句いさうへはまむかは私よほもはれのんと
あよお身お葉のうとのゆくとせむ室事地と
つよと連ばれのすとお宋れども一だくらふりま
めりほんふゆのすかよもとくへねすされはれよも
あよけり。ミテシカトモダニテスレル御くらえ
ひのまく小室題をうくねうと葉とくわき河とくわ

上をアキトカタマリテムリキニキニにわぬれ
ア第上の機義。未だちりキトハ済のうり。御義
業上のうきしりは氏のマキヒツトリと
よびつゝ代はハサウナカリキ。

は賀茂祭鉢明天皇御せ天下奉圓風吹雪余時勅
ト御任者。子千令ト乃賀茂神。崇也。撰冒充馬
鞆鉢人家猪釘而駕馳以為祭祀

以中わ近衛使例并と清使始可勘

も賀茂崇春日祭の使近衛司と用らう。東海をさう
れ。舞人。唐衣。と赤目。被冠。うじ。ヒハの下
立又道立。よもゆく。儀。あらす。
寺は賀茂祭のはのうる。一動り。と。まく。伯。平
島。すなは代そり車。すと。のうて。おとと。興陽。あ
かのた廢して。いて。も

柏木。ひ中ね。う。祭の使。う。の内。お。ひ。亭。わ。舞。は
上をアキトモん。あ。い。く。と。け。ほ。の。古。機。お。ま。り。と
左。内。仕。の。す。け。も。何。惟。先。章。相。せ。
ア惟。先。つ。じ。も。ア。方。い。け。し。く。

ぢり。と。う。

惟。先。も。ほ。代。の。天。ト。と。の。ま。に。一。を。せ。か。れ。も。く。と。一
寧。わ。す。れ。い。て。し。の。あ。よ。と。
タ。う。り。お。内。の。ア。リ。を。と。そ。ト。の。と
し。う。と。け。も。ち。く。れ。と。ワ。一。タ。苦。お。内。お。き。く。ら。オ。れ。く
く。ア。ん。と。か。と。が。か。よ。か。く。り。お。う。く。り。く。

内肉の事り言昇るよまくもあらず
何いわきの事りあひてりやうすにありけ
ニシテリとひら見つへくみつへ
ムトムアスル

きふの事りはゆづれどもくち
私ソ音の事わ中ね内肉とみそよむらとあ
むよすらぬりあといふをさん

ねづくじうけりおうとくすとひきりくし
かたしてもうたまめにやうとれんやうとし
折桂ハタ音のりとみ草生一とよすとと
私養とくよくら地あくひり定家とのすよ

久くれ桂よから草系うれをよいくせり
晋書曰郤說字廣基舉賢良對策為天下第一
刺史武帝改東寧會送同說曰卿自如何說對曰臣對策
為天下第一猶桂林一枚崑崙玉今以之謀試及第之事作集

桂葉

花原太にさゆりへりきるもくばうこむる
久くの月ハ桂をちりあひれどもゆする
もりせかしてはとぞ、てくわ

桂の葉風(桂の葉せじはまよくら)

めうめよみてくらひれどりとおりと
タ音のりくしれどもよりてくとよ
れられなへにそ すけはまのせ
アツカのふととんりと

私くてはけ版よ志くしわくもほ
かくわうりわ方をいりふへと
業のす す明石姓志入内のす

ほよかぐくへくは
ほのふはせとくく内もくよいすへと

かのあらへこをや

を明石のよせ 背

ほのうりうりうるこ

ふきいはわるひこす

家とのいはゆまへ言母ちれ姫君と家主様でまし

のんじれと

チ明石上へ

おのかうらも

おあしれ姫君のおんじよ

女姫君と家主様でましれと家主様でまし
の母とあくらくする所くらむりふとと

おのねりようへとまくわね

家主のすらりほ民又明石上姫君のまを寄て

くのねり

まくわあつなう

姫君のおなまくおまくおまくと

かうれとくらきとみとまくよと

見乃す、まくおとくかのいはるとまくよと
自よだかすまくせらやうてまくよとまくよと
松云おうれとくらきと上高のすえんよまくよと
を行ひる

まくわ

家と、我との所想

まくわ

まよのくのく、まよのくのく

あくよくよ

明石上へほのくよ

まよとくよあくよくよ

明石上の用意、りよすはまよおとくよ

あまたうんれえおおれえん

明石とれ母の尼云、言母明石とばぢり水をとまく
まくわ、母の尼君、くら後儀をのせんたれり
よとくよとくよとくよとくよとくよとくよとく

のあらへりて

葉上枝頭

輩也

も紫と水車よといはく水車のりあひ跡よにあ
こちこどりへりへりへりへりへりへりへり
轍、娘夫の車すなへは車上、圓車して車わ
まの洞よ紫と轍ゆ。それますと、いりがきる
と、車石上すり下り下りもよだれのすと、いりがきる
明石上へ先と、大、斟酌あり
私は以紫と水車と轍と円してあひよ明石上へだり
くすりあひよ明石上へだり
石上へあひよ明石上へだり
上へ、女房してうらみゆされの聲と、門へおきて、元氣
札アとさきて、さわげ
わりがくすりよぬと

月上人

人のやもとへくすり
すそれりよ
風の葉むのまつりたれいと
儀式すりとりよ

は
の
掌
を
の
ま
り
か

のせんじやく

トハカヒトヨウカシ

は東上の小言をすのとく愛憐へんわち

人よのうへ
も紫よのうす
りはねるよ

紫上（の）の、版打（は）ましはと
私文（すみ）本上（もと）てお版（はん）／よ、書写（しょしゃ）

母の復讐の事と相違
いふといひてゆつて
あれどもあらねえ

がゆく

（中略）
（中略）

三月立てまつりとよ

ちの石上の立つてまつりとよのひに室上の石上とよ

たいりんわらじとよ

たりくろり

は室上に退かわりて明石うわにありとよ

かみへりん

み業上明石すお母面わらじ

がくおとよひとよ

メ紫上の詞

す始末の古うての経ケ年月空す

ひあらうと紫上の詞

私云始末のことをかねもあるまい紫やまくに御殿裏
本月へこれも宮母なれづつに傍をとましむれ
どうとのりよえられ

と

ねりうつむきとおれをうりとけぬりとよ

けとの事ハ姫志と成くわりてけめなりとよな
寺業と内石とものとこされもる姫志と母のんせもち
よわとてあれりとつらじとよ

す明石よりめでくめ歎をとわるとよ

お聲すしりいによ

明石よとがへまくと紫のとれうとよ

じひととほのふとあむととわとよ

スヒケナ

業上ヒリ

み業上ゆすり

れつるしどりとよ

かまくらもとよ

明石上りい

ア乞り立るをすと我リとも申すトありル

ナリ

アテ御主トモ御主リクサミヨ退ガリ見シスニキ
軍の退ガリリム後モリ引ヒ行轅移キトモ
カツ車をゆれ候く
ア富上の事ニモラ候主テアリ

ア赤のあわりぬよシナシ

ア常上す 萝井とハナシの事トヤ

モ是消息の始末アシモサ御も主候事トモ車
ナリゆき候ふモおどきナリト明石の官主を賄
私請け候モ候あやまちリ軍上の事車ゆられ
て退か一候候アタヒニモ所ナとのトト

空モナリ先レ

アヨリヤドモシテ候事見難リトテアリ
トスケワリシムトシルトアリリヒナリトスアリ
カドナリ内をのむ

アトテツテキモヨイシナリ

ア嫁志の事モ明石の事

ア彼の事モアレハヒト内ねとうアルトモリ
カツアリモテテキシムヒトはモトヨリテアリ
アツモハヌシヒモリ

アツ云シテモモチテ候事トモ一ノ事ヒテアリ候事
リカドリカドリモシテ私云うけまにモテモトモ
カドモモテモテ候事モカドリモシテ候事

アツモカドリモテモテ候事モカドリモシテ候事
モカドリモテモテ候事モカドリモシテ候事

アツモカドリモテモテ候事モカドリモシテ候事

アツモカドリモテモテ候事モカドリモシテ候事

在りてゐまつてしま

ア收書てあわりとひ

かどるねどもさういはき

内石上のひりにいひもとを

たののじをおな

ほの娘志ぢりよし不思はず

たくちぬおなはし

明石娘志のす

えもむらもあんりよ

ツ春ま

いととりのふく

明石娘志のわ

め女志の

明石娘志のわ

いとみるやめ

うきわりのふ

業上也

かせりいわまや

くいりとけゆ

富上と明石上あるす

もとてゆきわすれそ

かくふんと明石上ヒラトリ

私は明石上れがくもあと業上にあす

がくもあくわのミちくさきのこゑ

ほの拳大内ふと

かくりいわむらのふく

お志女郎さうりす

おもむかすとおもむかす

てうまうちやうめい

うわづねれ

江桃所

レヒガハセトメテアシ

源氏お臣官ツ体テ源氏をセシムの事ナヨ
乃成名
遊テ身退ノ心

タメテアリ

源氏源氏一もふたとしのりん。業上事モうれ
いととすと秋好オホシ。ナムボシモアリ。出
まと月石の往来モシ。シテ。春のあゆ。もがれ
そりともさりと。ナム。シト。源の。うるぎ。

主の小よき。花散里

あれに。源氏。わや。もくして。ナリ。をまし。さ
れ。と。ナ。音。と。か。め。ち。う。て。し。ら。と。せ。は。く。れ
又。タ。音。の。味。眾。わ。り。と。ね。り。も。

あ。ち。ん。と。く。ま。り。よ
源氏の。お。と。明年。三十。歳。か。内。東。食。り。お。望。と
お。こ。す。ウ。ル。と。お。い。と。お。り。や。き。し。り。り。め。と。あ。れ。ら
れ。も。う。の。小。な。片。く。い。は。と。

執政人四十賀例源氏大典卷 聖宣公 貞觀七年四十歲
古今りりのむう。いも。う。え。年。姫。九。衆。感。り
一。も。ち。時。よ。し。れ。る。
そ。う。く。も。り。り。い。く。いた。く。せ。ん。じ。う。け。年。す
う。お。秋。な。上。天。皇。よ。か。す。く。ち。お。く。く。お。え。年。す。く。く。す
み。を。も。く。我。可。若。つ。き。う。う。年。宿。年。御。也
要だ。も。ニ。ア。リ。聞。古。日。
美。ア。の。に。ア。能。の。な。す。と。い。も。不。云。ト。小。秋。左。上。天。皇。等。
ち。と。え。名。ト。人。の。も。手。も。正。監。錦。は。首。尾。以。テ。此
を。す。と。ソ。ナ。ト。ト。ト。佐。ち。り。仍。而。レ。私。と。し。む。味。ト
を。長。是。天。皇。下。皆。證。先。也。位。よ。つ。ミ。詔。石。帝。也。位。而。て。え
る。ま。ト。ト。太。上。天。皇。玉。號。也。位。キ。詔。石。帝。也。位。而。て。え
ム。ト。ト。ハ。故。明。新。主。と。小。東。院。と。モ。ち。り。キ。其。例。傳。ト
但。太。上。天。皇。と。モ。有。ト。ト。ナ。レ。第。年。爵。封。ト。ト。キ。ト。ハ
太。上。天。皇。一。事。う。ク。お。だ。ト。モ。ト。リ。ト。特。殊。年。爵。封。ト。ト。

御とまつりも高との取扱いにあらじて封の
小宗院の院号の時食封ト如元と宣下ち太上天皇
や封は法令より定らるる句、其の食封は二千
アハナト近在すのを以れ小宗院坐の時古封と
その主とされしる。甲原氏君、太政大臣より開号を
うづさむ。右政大臣食封、祿令三千石以下也。又
小宗院の例として三千石と云ふが、たゞ、
組くわゆると云ふ。御三千石の下よぐくは、御三
方より及て食封と云ふ。御下よぐくは、御三
方殊恩たり。上宗院の食封のすれど、ア見を
(手)にあよ太政大臣封戸二千三百五十石と云ふ。あ

三正十九年
秋陽考
東
東
萬
萬
二
二
年
年
之
之

不踐祚太上皇例
漢韜例

史記曰於是高祖乃尊太公為太上皇
葵雍曰不言帝
漢書曰諸侯將軍群卿大夫已尊天子為皇帝而太公
未有號今上尊太上曰太上皇師古曰太上極尊人親也皇君榮之父敵也曰皇不預治固不言帝也

本朝例

草屋皇子天武之二子
文氏 追号長平天皇

曰並知皇子天武子
文武之 宝寧三年有勅追宗尊号備眾本天皇
舍人親王文武才公子
後路廢帝父 追号盡敬天皇 仁宗道盡敬天皇
施基皇子天智才三子
兄二之 追号田原天皇

寛仁元年八月廿日
勅旨甲子

太上皇帝
萬世
五位或四位
院司
別當
召勅
四位或五位
判官代
五位或四位
殿上人六位
藏人
命人
非命人
主曲代
廳官
名次所
仕所
御眼所
進物所
所衆
主者
所
清隨身

太政大臣之封户二千二百五十户也左上天皇八千户也而院号

よりて御封くわゆとよすの
私えけ封戸のすゑもんはいはあやまく

おうとせのふかよ

臣氏は仰りて、執政の人に打拂ひ
しゆくべきことをわづたうりんじ、モテテ、
あためての御改不改て二の御あら憲は簡太政
を廢たれもえむ改て簡すを神まへるに之被

てのまほ写もき西へ太政大臣の古村、之を
ゆとりぢういつくさくもかくとも
つゝくと、と、後半作はのじとへと、行
おも歎窩たるすと、

りにありよまへてさがへる所
かりくらむと
御幸の候式唯すげりと
がてれりすとひぢり
みと食事のやんばねをもがり
ひつるは(原の書)と
のせとひづて位とえゆてりぬと

内侍に於て改められ
寺の致仕のちの事、未だ御内侍
より直に遣され、向う一勅耳。清風も内侍
より任す國也。
寧相中わゆ。袖立す
夕方中内侍は成り

内裏の御臺所。お嘗たてを
御納言參議。内裏の御臺所。お嘗たてを

外音紋仕の室事すもひとむありしむとく
今とれどもあつて
外はちの女弘徽女御ハ秋好中年と小袖を
玄りれども女御下りすと身とるうりとウ
考へぬまするいよとてむかへふが草すようて川
と服立ありトシニシ女モテもとさんとがくすす
サキ井島ハカタのあつぐわらきりに足とりを
へとさりて

女君のたゞよのめのと

ア云升るてあと

六位とせとりよや

シ女ノ名よわりトシテ
着さみとく葉代墨と寫りセテ葉代のとけ
メ御緑六位と云ふとまは紫の三位とある事一
事

ヨリ葉の葉代墨とあらゆりすあがヒキ葉代と書く事あ

ト抱色ニ衣服全一位深紫第三位淺紫三位深紫七位深
位深綠七位浅綠八位深紫初位深紫也深紫は墨代耳
墨やは紫ハ五竹下ト位也深緋ハ萬子加紫深緋ハ萬子
深緋ハ藍と青安とト位也深緋ハ藍と黃簾ヒトクは
一縷ハ藍ハトトクは今世三位の抱三位以上と差異有
二束院西唐のはじめをすりてかれり小野ゑ右左毛
の紀よんとすりて入掌より金よりせも安志也やまき定
1玉すくねりおもりはすく便をもととうちハ七位衣毛
六位ナリハナムもむだもトスニ位三位ハ腹は紫半身と
半とすりて二位の抱のあがりとすれあがりとすれ大抵とも
て平常のすこそのうの庚明泰後の中納言よから時
九条左大臣抱をつゝ字とてあましがたどりり正華
納言セ泰後は三位の時革れもとた中字もわき代
のりりれ天の羽衣とすりては模の身よりとすりては
サキ緑ハ六位の抱(此葉ハ三位の抱)中紫三位抱
古三位抱三位したる改抱し由四記より三位

た浦のりととの御
事のうち國の事
教も志りしむの
ほどの御神事
は撰七言詩を
と東北へてゐる
が右たるに左へて
とと侍

いふとせむるふと
力浦のあとのじ葉

かはとやくまづのうり
ア音中納言よ故に（もつて）さうとおもふ
内ノ官也なみ才子よあらわし
不ぞうまと
不殊也

三事有
其の仕事
其の仕事
其の仕事
其の仕事

も
ち
し
て
か
ま
れ
か
ま
れ
く
て
は
の
う
た
と
た
と

せんとくとも打ハタフ
紫シキ大カミ、匂ヒ小コトコト花ハナ、成ル國クニ林リ志シ喬木ヨウモク、
鬚スル綠グロ千チ方カタ白シロ鳴メニ、八ハチ九クシ綠グロ亨トシ——前マサニ白シロ氏シテ文モノ集シラフ

一
4
居也
志士
井底虫れ称
アキラムのアモロハモモコ

同書は川多アリ

かくのうぢやう
玄蕃(くわんぱむ)

あくまつり
をかづくまつり

如
人
之
生
死
也

たれの川
のりあらわし

わざわざりあらしめのり東をもや宿す
う
眞清も体因みれ云ふ一水とむちに水といふが
水とある(たれと)に用ひ
まほほんといふと
もへらすてあれ、岩りあらひとと
五
力とシノのけいふれどつれ力くてもとやまきせられ
め
たまはとむかはぬれもととこと
すきりシのけみねんをやむと、とく事とあいに

まよひとトモリ
八重柳の水とよこまで小舟にて内とよも遣おきを
のあさてたすゆともうれもしむかさん
かと少すくないぬやうもれどこの風をかうしてあら
おとしづく

大正九年夏月
齊東野語

たまの寸のゆき。

うむわ

卷之二

云升石室之文氣也

شیخ

ありはせでかく
あのやりもふあとも

しりへぐれ

お圓へまゆ

おねのからひと引きとちもあてといへり

おとこがハリ者て自縛の詞

おとこに左改木にこぢるり方をてる

おやもと見ぬくをすんともいふなきぬとみれ

ヲ音と玄井居の中うて財物のう

私あてとはあて越前ともかとをますごもと

うるあたれお圓の二人と並びてソレおぬと

端のうじれ老木にじらくらぬくとお木あすむ

お木はくらふんとくらうらうお木あすむ

お木へのおえのいじつべてやねしけせいより

おの祠よおとくとありぬるたますモ井

居のねだねましよおとすくとめられ

今とぞしてよのほづれとすくあくまをよろざく

今とぞ我の老木とぞれると

松玉枝は根芽の基本となれどとへりすきおまのよ

頃矣のうけれどもくちやんう者を井居のやう

なりぬづらはのすりと一ひととと取てこトミニル

ちとぞ君の幸ねためのと

ア音の亂母打

ア音の乱母打

ア音の乱母打

ア音の乱母打

ア音の乱母打

ア音の乱母打

ア音の乱母打

秋月のすみやうながよと東洋りゆめり

康保二年十月九日村上天皇御在流より書より
御在流の事のあはれてわらをもすイチ

卷之四

少下例ロヤシム抄は凡てトヨリ
庚午二年十月七日志記此日正月

康保二年十月七日拂記。是日以草牛舊隨辰出紫
宸殿。自朱雀路到朱雀院入。自永寧坊就馬場殿。
仰允大將源朝臣可令官沖馬。一木原乃下殿。仰了
更參上台。近かね爲先。進立東階。小邊源朝臣仰漸
馬令馳。若充福准退還本陣。暫在近監。下近衛
下若丈人起陣。勢向西廄。良久馳而馬白馬馳在奔
殿。北馬奏參上奏之驚。小上。先十引次當。隨次地了
木杪え。后某上。秋のり。せばぬ。とあり。下。されば
行すのと。五つもよどりあり。冬秋よどり。すがわ。も
角。すみれ。

すと云は来たばかりの店舗の事もあつても

原大和元代院七律奉上

大業之序

このせよりをりて
已時

御内閣のため
はるか東洋用意され

月
角
七
日
之
五
日
濟
財

のた
わ
て
た
せ

御紀云。宋興移柏殿。自坪東邑行到時未一駐下。與入式。移云。八月半。付之。至。

みのりとてうわくこと取るは難うよ。ト
を造道のうへ布單に錦とうれいとよ
ぜトヤとい。

軟岸也 給シテナリ是希とのアガリ也

ミツのういのち、

ミツ不^ハミ上の内膳とつさども^ハされよせん

物^ハ物^ハナリ

浦厨子町別當一人預膳^ハ龍^ニノ^ハ飼^ハ人細
やふ^ハ類 賦負令^ハ雜供^ハホリモ^ハニアリト^ハシ

物事

先代田事本紀曰献浦邊食之時禱日而擇全神化移入

の庵^ハ出底塙

美^ハ同^ハ、來院^{シテ}の^ハ浦厨子不^ハ能^シの^ハ事^ハと^ハ内裏^ニ
あ^ハめ^ハ一^ハ勤^シ浦厨子不^ハミ^ハ上の内膳とつさども^ハ
タ^ハレ^ハセ^ハられ^ハたる^ハね^ハナリ

ち^ハは^ハある^ハと^ハナリ

天作四年八月十一日申社之釣殿古漁者丹波春助下納抽
魚得三唯鯉射而放入^ハ夜還浦

應和元年三月廿日之釣殿覽叟納又令迄丹

浦記延森八年八月廿八日從神泉苑西振門入御^ハ御^ハ大臣
作合^ハ捕池莫右未門皆清經朝^ハ持可^ハ捕得^ハ魚奉覽則^ハ
前料理供膳餘給侍臣^ハ石泉門先輩茂洞^ハ膳

厨子町百人階下調給臣下

此時騎

射^ハ三度

同年十八年八月廿入神泉苑東門至馬埒下輿計間^ハ御^ハ未門
ハ細捕池並付^ハ厨子所調供又南屏^ハ下調給侍臣^ハ木乃酉

一冠競馬

同年十月八日幸朱雀院為院造作乃御馬也在御^ハ皆友原
朝臣請^ハ捕魚依^ハ請^ハ在御門官人羣門^ハ令昇御^ハ入施細
前^ハ得^ハ鯉射十餘枚於浦^ハ亦調供又^ハち东御下調給侍臣^ハ
木乃酉^ハの^ハうん承^ハうん承^ハおも^ハす^ハの興^ハり^ハ
う^ハしたと^ハそれ^ハと^ハ手^ハの比^ハル

此よりもちいはよもぢくねどりのおりへ
行のおりへ秋好中えのあらみ

松林家おな枝とよほ木の葉うつりふ雪を秋
のりめりかわせれすとりくとがれ秋好中えがゆす

住みふきと西の町をちりりす

中へらうのぐ

秋好中えとのゝすの壁なり

拂ひよそひよそれく

御座ニ也

朱雀院と六条院と也

す主上冬泉院朱雀との御座ひらして源氏乃ち本庄院

とけてまくけれらると秋云は筆を秋ノ季物

せんドあつてなまこせりよ

みと冷泉宣角わたりて源氏の御座と朱雀の御院

うるすり 秘アルシテリサケルシリ白鹿ニキナリサセ

みとひれまわらむちやくへと

朝親のり幸よハ扇、砲とあす上皇をねーきすあり

必 朝観行幸の作法をわりとれとす
私りやへーさへ奉ノ字の心も

他にいそとんのりぬとく

もひりいじいと右のとけとけく

美 向け作法少くもる儀も又ねだとわら意もく
わらくふしや一巻先に走れるはく一奏老矣とぞとく
もわらす下駄輕の勝者と時よりと魚の安樂地れも
にとりつけねねと音をもとよか又あは年走るよ

す 挿も奏活下す

近在廿年十月十八日摺中納言藤原朝に着小鳥於菊枝
立筒前奏し 船木氏有進御贊

鷹銅事

康保六年七月廿一日藏人以近光朝臣以左馬助滿仲右近
府生多ム高右近番長播磨貞任木並馬済鷹銅
職貞令云主鷹司正一人掌訓習鷹大支

濟寧同人所被宿仍為右佐羹之也
供濟執事時一庄人可賜膳而之由你

私立右のちかとつるはれ近のりねん

收仕招應行

卷之三

かへりしりんくわ
おまけうへりや
ち葉を高木に見
王御取狀也す
折樋井地をうへ
るつりよひ

かくのん
かくす

此之大業也。其不

朱葉のゆきのゆきの葉

原氏と仕事

卷之三

賀王恩
或りおんは王七恩と申

内の外とわざなどいう

上と冷泉の匂

予自頃勅宿一時父年既定係也

の流はゆくよ

アラタの馬鹿野郎

ムサシノハ天上天皇大政方

古之有國者，其君不以國私其子，其臣不以國私其子。故國無私子也。

わ國のふりは、おまかせれけ

相回少之久也極官才之多也

ねあのえ

アキモトトモハシ

せんじ
せんじ
せんじ
せんじ

うれし事ばかりと云ふよ。さう
したての事よ。つるぎもあわせ
がくの事よ。どうもあまへり

向
美
廢
玄
奇
星
れ
ん
よ
く
向
く
す
れ
ん
よ
く

曰くすへんあら向ゆるまもす星ひれ五仙境のす先
一勘紫雲といひ御よこすとく堯の内森が跡仙境のす
よかわいに紫雲といひもて紫雲ともあり又有星よ似
しけよこすとく堀とよかわ又紫雲と云林牛村す

河南仲記曰隋日紫東

南仲記曰膺紫雲之瑞生堯也而石向北芽葉南風之秀達之上臻堯母感氣虹快岫之安之下入堯母之懷好也帝王世記曰堯生時紫雲復於殿上此亦時難遭九年水氏謗不采食

すくめりけんとさかく
の
秋とてうつ時わあけ
何の川かと因りまく
はれ太上天皇よらわ

白櫟

をもよわゆ
異同

をの人の手をまわるにあたるとかゆうじうこ
はうこのいと衣の今がれしとつてとくもよし
はりとあいとあやしくとには眉が
みゆめ秋夜えりくわきそよぎ北地こそ

私云向は此木衣服令僧尼全天長於太政官府新
候式も申れ記大久保也それ花もよき事
つるくとも爾方とすよ「うて」
一平

或持手左云櫻の外更
御用大朝清也御赤白櫻、
櫻と茜とより除てあくとすと云て青白櫻、前安と
紫とより除てあくとひと云て白櫻と云ふ。前は不見
赤足吉多とよし見す。天子内窓大附令署赤色也給其
外和玄客内とし依附天用丸文字等、馬とせ不見内窓丁
帝御の赤足御袍、唐生緋タジヒと花も行幸并友の
乗車シマツに直れ玉坐上一条あま白足赤アマハクシ三丸立
白櫻し名稱為汝不寫よは君赤足も免ハラフモ也
いわゆるわすす御白藍アマハラフすと其様山元伊萬イマニ白つ

もことあらはるを以て亦又通用の稱と見しに別不覗
深色以て君晦不及す常七八空と下に一筆あり向
同題

のうへまむくいひより
東壇れ所へ
西神をすこひいりゆき
さう一勘はい天
冠たまわて、ころんえふく
アラニキ 鶴角の額とつる見

毛のらむむび
向
東重れ所
西野をすこい
冠たして、ころんと
うへて地もじと
小樂とも、和門

同
者
也
也

情

すく不才とおどりかとす
も下つて御まよひへ

不ふれ用意はるる
あれ左鼓鉦鼓を打
乱毛たゞわらへおまわ
りとく

うのやあくいもつて情けんのつむぎとこゝの
黒毛とあつらぬ扇(一) 奇才大扇

向
墨書察のよこ 田記」
「筆者、其官、古玉器、一由見
より累代の不黙と納》ゆく(お)

仰記延祐八年節令雅不察立采後石和琴
白方丈本元篆

トモハナガシ

お詫びの事とおやまの事

向之法師和琴名物也。考作先。余謂抑時內裏
歌舞也。

燒七之時燒柴至
新條式 胥甸後

歌者近

若有奏絲歌者近大臣。府賓不許。內侍奉。仰出。屏。屏。南
邊。召大臣。起。座。跪。候。御。屏。屏。南。頭。即。勅。可。召。堪。管。絃。歌。
王。卿。大臣。奉。行。退。歸。召。出。居。令。置。草。塾。於。濟。帳。東。
至。一。許。丈。大臣。先。進。著。草。整。次。依。治。移。著。大。臣。治。書。日。三。塾。
人。執。和。琴。出。東。障。子。戶。獻。之。謂。宁。也。若。奏。絲。竹。或。立。殿。上。侍。
臣。能。歌。者。預。之。王。卿。遂。勸。孟。教。曲。之。後。奏。見。衆。

小野宮右大臣記長保二年十一月十九日新宮之後出御南殿同
右大臣以下官絃人着御衣草塾次立書司と女鳴取亨院法
師出自御簾子戸置草塾前又綿竹吹取出皆書夏
宮役二人見前例或書夏宴官取出和琴已後吹綿竹近
衛次將木軌之賜
或記五延久四年宇治殿令一教南殿御在時呂守院法
師和琴其詞云御ノナラシ此詞有故在師教云宇治の法
師とし

朱雀院へく時すすりのむかとくさがりもひのありてくわ
朱雀院のあ在位の中よこなすにかくしとせ所れ
は懐のぬあり

私秋とく時すすりのむかと朱雀の早下詞く時す
すりの名里よそくら葉はえんねくねと

けよろ

悔恨遊仙窟朱雀院の我古作よもじ行すをすと
恨おきりす

あひてすりもとやみぢうのたぐいけるをののきと
すと首のぬ葉繁のすりうつると云ふもと云ふこと
私あひてのりもしよふあくと首のたぐいれどまれむる
やとの湯やわとすとりよそとすとぞきりと因み
事ちきの五葉よあすと河冷泉院の自歎の名を
ゆきらべく

冷泉サとのぬありと

けいの物と

原と主上と身代りとはぬとぞりよと
十鈴言のまづいぬ

タ音とそと又はよく似りよと身代りと身と身

私云先づう音のみとく似もとすと世はれり
あてよりてくきけりいやおりしり

みと冷とタ音とく似もとすと世はれり

のよやくふりすと

又ちきやふれくとすありう音はまくと

冷とほよのひりよとよ入りう音と曰へやかなを
もむかひききとくとすと

中とお層上人

唱う層上人

五音大法と

あせて寛海より今もれくとくもすと

まづり

とは直哉わ前すとのすとぞ

凡は寒い原代の家もすとぞうすにあは室とぞ
室家もすとぞ入内のは華ゆされをとらくのすれ
居葉よし女こえのすとぞうてやうてつまむれ
じりかやましりくはねよしとりい原と常と病
さるすとありとんとんやのよせうれ感美とち
くとせとませりんとばくと



